会長に就任して

土木学会第60代会長　岡本舜三*

今回はからずも土木学会会長に推挙され身に余る名誉と存じております。もとより浅学非才の身，よくその任に耐えうるや否や心もとない次第でありますが，お引き受けしましたからには会員諸兄と事務局諸氏のご協力を信じ，微力をつくしてご期待に添うべく努力いたしたいと存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

最近におけるわが国情の大きな変化はものごとが著しく巨大化したことであり，そのことが利害得失ともにいろいろな問題をおこしています。土木界においても国全体のこの動きと変わるところはありません。すなわち，土木技術者の扱うべき範囲が急速に広がり，土木についての固定的概念はもはや持ち得なくなりました。また，社会が複雑化し1個の土木施設をつくることの影響が広範囲に波及するようになり，局部的視野での合理性は全体としては思わぬ不合理をひきおこしかねない時代となりました。また，個々の構造物においても，それを構成する各部分が専門化し，1人で全体を見ることは困難になってきました。個人の力の最も重視される純学術研究の分野でさえ，この傾向は同じであります。

このような事態のもとでは全体は多くの核に細分化され，個人はその核の中にこもることになりましたが，ひとたびそこにこもってしまうと，心ならずも他との線が切れ，多くの情報からも孤立し，社会の流れをただ茫然と眺めるのみで，そこに不自然さを認めても，どうすることもできなくなってしまいました。そして現代は個々の人間の活動が昔より矮小化しているという奇妙なことになっています。

こうした全体と個との間のきわめて大きな不均衡に対処するには，個々の間の連絡を密にすることが非常に有用であり，必要でありますが，孤立化した各個を連絡し総合的成果を生む基礎をつくることは，これまで学会のやってきた仕事の主要部分であります。学会はその目的として，「土木工学の進歩および土木事業の発達をはかり，もって学術文化の進展に寄与すること」をうたっており，具体的にはこうした仕事を通じて，その目的の実現をはかってきましたが，いまこの時代にいよいよその重要性を加えてきたということは，学会理事者の一員として，その職責の重さを感じないではおられません。

学会は学会誌を通じてできるだけ多くの情報を流し，問題解決のヒントを示し，会員諸兄に考える資料を提供すべくつとめてきました。その記事の中に，あるいは会員の声の中に，現在の土木界の中で改むべき問題，新しく掘りおこすべき問題がしばしば指摘されていますが，これらを断片的な声にとどまらせず，全体の動きに反映する膳立てをすることは，学会の重要な仕事であろうと思います。

また，学会には多数の委員会があり，研究連絡の役割を果たしていますが，この機能は今後ますます活発に発展させてゆかねばならないと同時に，各委員会間の連絡も密にし，さらに大規模な成果をあげるよう配慮すべきであります。学会は，またこれまで他の学協会との連絡にもつとめ，共同して調査・研究や行事を行なってきましたが，今後はさらにその範囲を広め，人文社会方面をも含めて，密な連絡をとるべきだと思いまい。このことは，また広く社会における土木への理解を深めることにもつながることでありましょう。

さらに，最近は海外諸団体との連絡の重要性がいっそう増しつつあります。従来の学会のこの方面の活躍は，その実力に比して，いささか少なすぎるような感がないでもありません。学会を通じての学術上の交流は海外との親善を増進する基礎であり，ひいては，より広い海外交流にも貢献することになると思います。

以上は個々の間の物質的なつながりについて述べましたが，さらに大切な学会の役割は，孤立化した個人間の人間的なつながりを回復することであろうと思います。学会はこれまでも学会誌・会合・旅行など，あらゆる機会をとらえて会員間の親睦をはかる努力をしてまいりましたが，まだ十分とはいえません。これについては，会員諸兄が会員たることに誇りを持たれ，その自覚のうえに積極的に相互の親睦をはかられることも，この時代には必要ではないでしょうか。また，学会としても，どうすれば会員により親しまれる会となるか，私どもが考えなくてはなりませんが，諸兄からのご提案も期待しております。

1970年代に入って世の中は大きく動いており，その中における土木技術者の占める比重は非常に大きなものになっています。このときにあたって，日夜斯界発展に心を砕いておられる会員諸兄のご健康とご活躍を心から祈念し，あわせて所感の一端を述べてご挨拶といたします。

* 正会員　工博　埼玉大学教授　理工学部建設基礎工学科